

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

海の神様と山の神様

かみ島はどちらのもの？

右手のない阿弥陀様

海の底で見守る手

伝説

海の神様と山の神様

かみ島はどちらのもの？

右手のない阿弥陀様

海の底で見守る手

紀行

播磨灘をめぐる神仏

- ・ 東播磨の名山
- ・ 時光寺の阿弥陀様
- ・ 家島の大神

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

海の神様と山の神様 かみ島はどちらのもの？

むかし、播磨灘（はりまなだ）にうかぶ家島（いえしま）の大神と、志方（しかた）にある高御位山（たかみくらやま）の神様が、けんかになりました。けんかの原因は、家島と高砂（たかさご）の間にうかんでいる、かみ島という小さな島です。

「かみ島は、家島のものだ」

「いいや、かみ島は志方村のものだ」

高御位山のふもとに住んでいる阿弥陀様（あみださま）は、「神様どうしのけんかだよ。仏の私が出ることもなからう」と、しらんぷりをしていましたが、二人の神様のけんかは、いつまでたってもおさまる気配がありません。とうとうしびれをきらした阿弥陀様は、神様たちの仲立ちをすることにしました。

かみ島には、一人の女神が住んでおりましたから、阿弥陀様はまず、この女神に会いにゆくことにしました。女神に会って、どちらの神様が好きかとたずねると、女神は家島の大神の方が好きだといいます。

そこで阿弥陀様は、高御位山の神様の所へ行って、こういうことだからとわけを話し、かみ島を家島の大神にゆずるように言いました。

ところが、高御位山の神様は納得できません。夜のうちにこっそりかみ島をつなでしばると、力いっぱい引っ張りはじめたのです。これを見ていた家島の大神はびっくりしました。

「これではかみ島を取られてしまうぞ」



そこで大神は、家島一の力持ちであった孫兵卫（まごべえ）に大きないかりを持たせて、かみ島を引きとめるように言いました。孫兵卫がかみ島についてみると、島の根っこがはずれて、かみ島はじわじわと高御位山の方へ引きよせられています。

「これはいかん」

孫兵卫は、大いかりのつなを、かみ島にぐるぐると巻き付けると、いかりを海の中へ投げこみました。すると、動いていた島が、ぱったりと動かなくなったのです。



高御位山の神様は、急に島が動かなくなったので、いっそう力をこめてつなを引っ張りました。うんうんと力いっぱい引っ張りましたが、かみ島はびくともしません。そこで、足をふんばって体中の力をこめたたん、つなはとちゅうでぶつりと切れてしまいました。高御位山の神様は勢いあまってひっくり返り、ごろごろと雷（かみなり）のような音をたてながら、山のてっぺんから落っこちてしまいました。

今も、かみ島の南側にある、大いかりとよばれる難所は、こんなわけのできたのだということです。

右手のない阿弥陀様 海の底で見守る手

今から800年ほど昔のことです。印南郡（いなみぐん）の阿弥陀村（あみだむら）の村はずれを歩いていた、猟師（りょうし）の善四郎（ぜんしろう）が、あれ果てた寺のそばを通りかかりますと、大きな松の木の前に、なにかが転がっているを見つけました。

近づいてみると、それは阿弥陀様（あみださま）の像でした。よく見ると、その右手のつけ根には、鉄の矢が突きささってました。

「仏様に矢を射（い）るとは、なんとばちあたりなことを」

せめて我が家でお祭りしようと、善四郎は阿弥陀様を背負って帰ることにしました。



ところが御着（ごちゃく）のあたりまで来たときです。背中の阿弥陀様が急に重くなって、一步も動けなくなりました。どうしたことかと思っていると、

「善四よ、善四。ここでよいから、おろしておくれ」

なんと背中の阿弥陀様がそうおっしゃるのです。善四郎がびっくりしていると、阿弥陀様はなおもおっしゃいました。

「私を、この橋の上から、川へ投げこんでおくれ」

善四郎はまたびっくりしました。



「とんでもない。そのようなおそれ多いことはできません」
善四郎がそう言っても、阿弥陀様はどうしても川へ投げこむようにとおっしゃいます。とうとう善四郎は、阿弥陀様をかかえ上げ、川の流れに向かって投げこみました。

「ああおいたわしい。申しわけないことをしてしまった」

善四郎は手を合わせて、何度も阿弥陀様を拝みました。ところがしばらくすると、とつぜん大つぶの雨が降り始めて、川の水がどんどん増え、阿弥陀様はごうごうと流れる水にまかれて、川下へと流されていったのでした。

それから三年がたちました。

ある夜、善四郎の夢に、あの阿弥陀様が現れておっしゃいました。

「善四郎よ、私はあのあと播磨灘（はりまなだ）へ出て、海の底から海で働く衆生（しゅじょう）を守っておった。だが来年からは、地上の衆生を救わねばならぬ。ご苦労だが、曾根村（そねむら）に行ってくれぬか。その日笠山（ひがさやま）にある黒岩で座禅（ざぜん）している僧（そう）がおるから、高台から見て光っている海の底を探るように伝えてくれ」

翌日、善四郎が言われたとおり日笠山へ来てみると、岩の上で一人の僧が座禅を組んでいます。そこでさっそく阿弥陀様の夢の話をしめすと、僧はたいへん喜びました。僧の名は時光（じこう）といました。

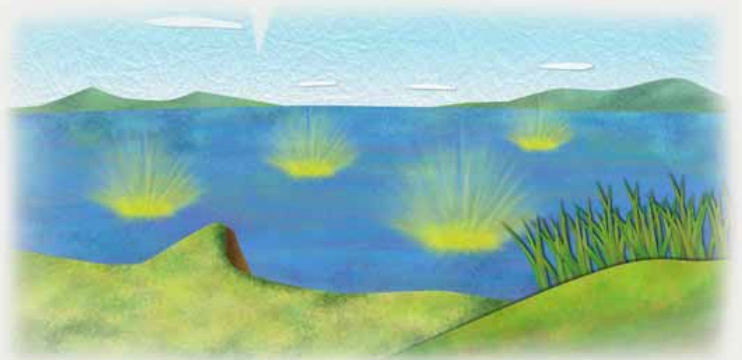
时光はさっそく、家島の東にあるミノ島の高台に登り、二十一日間座禅を組みました。座禅が終わったその日、広い海のあちこちから、金色の光が立ち上るのが見えました。そこで、漁師を集めて光っている海底にあみを下ろしてみると、ばらばらになった仏様の体や手足などが次々にかかってきたのです。

それをつなぎあわせると、あの阿弥陀様の姿がみごとにできあがりました。

ところが阿弥陀様の右手だけがありません。どうしたのだろうとさわざ始めた人々に向かって、时光は静かに言いました。

「これでよい。阿弥陀様の右手は、これから先も海の底にあって、海で働く衆生をまもってくださるのだ」

こうして、右手のない阿弥陀様は、日笠山のふもとでお祭りされることになりました。そういうわけで、高砂にある時光寺（じこうじ）の阿弥陀様は、今も右手がないということです。



右手のない阿弥陀様 海の底で見守る手
おわり

紀行「播磨灘をめぐる神仏」

東播磨の名山



高御位山

播磨灘（はりまなだ）を見晴らす高御位山（たかみくらやま）は、山好きの人にはなじみが深いかもしれない。標高はわずか304mしかないが、南北の登山道は岩場が露出したかなり急峻な斜面で、登るのにはけっこう骨が折れる。東西はやや緩やかであるが、代わりに長い縦走路があって、全行程を歩こうと思うと、健脚の人でも5～6時間はかかるだろう。

JRの山陽本線ならば、曽根駅の少し東側あたりで北側をみると、正面にながめられるのがこの山である。

高御位山の南麓は、高砂市（たかさごし）阿弥陀町という。「右手のない阿弥陀様」の話の中で、時光上人が海から引き揚げた阿弥陀様をお祭りするために寺を創建し、それがこの地に移転されたことが地名のおこりだそうである。

国道2号線の阿弥陀交差点から、北へ1kmほど上った山ろくが、最短距離の登山道の登り口である。上るほどに岩肌が露出して急な登山道は、重い機材を抱えた取材の時にはとりわけ大変であった。中腹を過ぎたあたりからは、高砂市の市街地から播磨灘への眺望が開けてくる。雄大なながめで、さほど標高もないこの山がなぜ人気があるのかわかる。南西に目を転じると、尾根になかば隠された家島群島が見え、その向こうには四国の島影がかすんでいる。



播磨灘（家島方面）を望む

時光寺の阿弥陀様



門前の宝篋印塔

阿弥陀の交差点から県道395号線を南へ下ると、道はすぐにJR山陽本線の線路を越える。坂を下りきって間もなくの角を右（西）へ折れると、正面が時光寺である。



時光寺（門）



時光寺（本堂）



本堂の内部



時光寺（看板）



時光寺（門）

播州（ばんしゅう）の善光寺とも称される時光寺は、1249年に時光上人が海中から阿弥陀如来像を引き揚げ、これを本尊として創建したことに始まるといふ。播州善光寺という俗称にも、ひとつの伝説があるそうだ。昔、兵庫に住む老いた行者が、毎年信州の善光寺へ参詣（さんけい）しているのを見た善光寺の阿弥陀如来が、その労苦をあわれみ、「時光寺の阿弥陀は善光寺の分身であり、三度参詣すれば、善光寺へ一度参詣するのと同じである」と教えたのが始まりだといふ。

お寺のご厚意により、拝見することができたご本尊の阿弥陀様は、確かに右手のひじのあたりから先が無いようだった。



本尊（阿弥陀如来立像）



網堂

この阿弥陀様を引き揚げた網を納めたのが、同じ高砂市内の伊保東（いほひがし）にある網堂である。網堂は、伊保小学校北東の集落の中ほどにある。村の中の細い道を行かばならず、少し見つけにくいのが、新幹線沿いにあるスーパーマーケットを目印に、その東側の道を南に入ればよい。

古い家や築地塀が続く道を行くと、村の中にぽつんと、思ったより大きなお堂が目につく。なんの飾りもない質素なお堂であるが、今もきちんと掃除され、お祭りされている。

この阿弥陀様が、もう一つの伝説でも活躍しているということは、伝説ができたのが時光寺建立以後だったのか、あるいは建立以後に脚色されたためだろうか。どうもお話そのものは古そうに思えるので、僕としては後者の意見を採用したいのだが。

高御位山の神様が、家島の神様と上島をめぐって争ったという伝説は、なかなかユーモラスなお話である。高御位山の神様には、もう一つ古い伝説が『播磨国風土記』にあって、海の中にある牛島という島の神様との争いがその内容になっている。このお話では高御位山の神様が勝ったことになっているが、いずれにせよ、高御位山の神様が相当古くから人々に知られていたことは間違いなさだろう。



網堂（内部）

家島の大神



一方の家島の大神も、古くから祭られる神であり、その点では引けをとらない。家島本島の北東端にある家島神社からは、少し遠くはなるものの、高御位山の頂上を見ることができる。

姫路港から船に30分ほど揺られると、家島に到着する。船が島へ近づいて湾に入りかけるころ、進行方向左手の半島の先に、石造りの鳥居を見ることができる。これが家島神社である。島最大の港は真浦港であるが、神社は湾の東にある宮港からが近い。

家島神社は、家島群島最大の島である家島の北東端、天神鼻（てんじんはな）の山頂にある。島の北東部には平地がほとんどなく、港から、海岸に沿った細い道の行き着くところが家島神社である。ここにお祭りされているのは、オオナムチノミコト、スクナヒコナノミコトという国土経営でおなじみの神様たちであるが、天満大神もともにお祭りされている。

菅原道真が大宰府に流される途中で立ち寄ったという伝説もあるようで、本来は天津神が祭られていたものから、次第に天神へと転じたものなのだろう。



家島神社
（遠景 海上から）



海上から見た鳥居



家島神社（鳥居）



家島神社（境内）



家島神社（本殿）



家島神社（看板）

瀬戸内に浮かぶ小島であるにもかかわらず、背後をうっそうとした原生林に覆われた家島神社は、古代の謎を今も秘めている。この島こそがオノコロ島だという説があるのも、うなずける。そう思いながら短い家島滞在を終えた。

用語解説

播磨灘（はりまなだ）

兵庫県の播磨地域に面する、瀬戸内海東部の海域。東を淡路島、西を小豆島（しょうどしま）、南を四国によって画かれている。面積は約2,500平方キロメートル。近畿、中国、四国、九州を結ぶ重要な航路がある。

高御位山（たかみくらやま）

高砂市と加古川市の境界にある山。標高は304m。低山ではあるが、山頂から山腹にかけて岩盤が露頭する急斜面が続く。頂上からの展望がよく登山者も多い。また、高砂市北西部の鹿島神社からは、百間岩、鷹の巣山、鹿島山、高御位山と続く縦走路がある。

時光上人（じこうしょうにん）

鎌倉時代の僧（？～1276）。俗姓は源経家（みなもとのつねいえ）。浄土宗の証空上人（しょうくうしょうにん）の弟子となり、時光坊と称した。高砂市伊保崎（いほざき）の心光寺（しんこうじ：現在の綱堂）での修行中、五色の雲に乗って現れた高僧のお告げによって、播磨灘各所で綱を引いたところ、阿弥陀如来像の手足や体が引き揚げられたという。時光寺は、この如来像を祭るため建てられたもの。

阿弥陀如来（あみだによらい）

阿弥陀仏と同じ。大乘仏教の浄土教の中心をなす仏。修行者であったとき衆生（しゅじょう）救済の願をたて、成仏して後は西方の極楽浄土で教化しているとされる。自力で成仏できない人も、念仏を唱えれば阿弥陀仏の力で救われ、極楽に往生すると説く。平安時代に信仰が高まり、浄土宗・浄土真宗の本尊となっている。

家島群島（いえしまぐんとう）

家島群島は播磨灘北西部に位置し、大小40余の島からなる。家島の地名は、『播磨国風土記』にも見える。島名は「えじま」と言いならわされていたが、昭和3（1928）年に町制が施行された際には、「いえしまちょう」と定められた。平成18（2006）年に姫路市に合併された。

時光寺（じこうじ）

高砂市時光寺町に所在する浄土宗の寺院。遍照山（へんしょうざん）と号する。また、播磨の善光寺と称される。縁起によれば、時光上人が播磨灘の海中より引き揚げた、阿弥陀如来像を祭るため、1249年に堂宇を建てたのが始まりという。その後の争乱で幾度か焼失したが、1613年に現在の本堂が再建された。境内の石造宝篋印塔（ほうきょういんと）は県指定文化財。

善光寺（ぜんこうじ）

長野県長野市に所在する無宗派の寺院。尼寺であり、浄土・天台両宗の管理に属する。定額山（じょうがくさん）と号する。7世紀初めの創建とされるが、詳細は不詳。本尊は、欽明天皇の時代に、百済の聖明王から献じられたという阿弥陀三尊であるが、絶対の秘仏であり、善光寺住職さえ見ることはできないという。本堂は昭和28（1953）年国宝に指定されている。

用語解説

網堂（あみどう）

高砂市伊保東（いほひがし）に所在する堂。時光寺の本尊である、阿弥陀如来像を引き揚げた網が祭られたという。

播磨国風土記（はりまのくにふどき）

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

家島神社（いえしまじんじゃ）

姫路市家島町宮（みや）に所在する式内社（しきないしゃ）。祭神はオオナムチノミコト、スクナヒコナノミコトと天満大神（てんまんおおかみ）。創立年代は不詳であるが、840年には官社に列せられている。初めは天神（あまつかみ）を祭っていたが、後にオオナムチノミコトとスクナヒコナノミコトが合祀（ごうし）された。天満大神（菅原道真）を祭神とするのは、天神を天満大神と誤って伝えたためという。

オオナムチノミコト（おおなむちのみこと）

記紀や風土記に見られる神。国造り、国土経営などの神とされるほか、農業神、商業神、医療神としても信仰される。大穴牟遲神・大己貴命・大穴持命・大汝命など、さまざまに表記される。『播磨国風土記』では、葦原色許乎神（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。また記紀では、大国主神（おおくにぬしのかみ）と同一神として扱われる。こうした神名の多重性は、本来、各地域で伝承された別個の神を、記紀編集などの過程で統一しようとしたため生じたものであろう。

スクナヒコナノミコト（すくなひこなのみこと）

記紀や風土記に見られる神。『日本書紀』では少彦名命（スクナヒコナノミコト）、『古事記』では少名毘古那神（スクナヒコナノカミ）。『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトとともに国造りをおこなったとされている。道後温泉や玉造温泉などを発見したと伝えられ、温泉開発の神としても祭られる。『古事記』によれば、少彦名命は、天之羅摩船（アメノカガミノフネ：ガガイモのさやでできた船）に乗り、蛾（が）の皮の衣服を着て出雲国にやってきた小さな神とされており、民話「一寸法師」の原型とも言われている。

天満大神（てんまんおおかみ）

菅原道真を神としたもの。天満宮の祭神。

菅原道真（すがわらのみちざね）

平安時代前期の公卿（くぎょう）、学者（845～903）。菅公（かんこう）と称された。幼少より詩歌に才能を発揮し、33歳で文章博士（もんじょうはかせ：律令政府の官僚養成機関であった大学寮に置かれた教授職）に任じられた。宇多、醍醐両天皇の信任が厚く、当時の「家の格」を超えて昇進し、従二位右大臣にまで任ぜられた。しかし、道真への権力集中を恐れた藤原氏や、中・下級貴族の反発も強くなり、左大臣藤原時平が「齊世親王を立てて皇位を奪おうとしている」と天皇に讒言（ざんげん）したことで、大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷され、同地で没した。

用語解説

大宰府（だざいふ）

中世以降太宰府とも表記するが、歴史用語としては「大」の字を用いる。

7世紀後半に、九州の筑前国（ちくぜんのくに）に設置された地方行政機関。外交と防衛を主任務とすると共に、西海道9国（筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、薩摩、大隅）と三島（壱岐、対馬、種子島）の行政・司法を所管した。与えられた権限の大きさから、「遠の朝廷（とおのみかど）」とも呼ばれる。

天津神（あまつかみ）

記紀神話で、神の国である高天原（たかまがはら）にいた神。高天原から日本国土へ降ってきた神、およびその子孫の神も天津神と呼ばれる。これに対し、元から地上にいた神を国津神（くにつかみ）と呼ぶ。

オノコロ島（おのころじま）

「自凝島」と表記する。記紀の神話では、日本で最初にできた島とされる。その内容は、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）・伊弉冉尊（いざなみのみこと）の二神が、天浮橋（あまのうきはし）に立ち、天沼矛（あまのぬぼこ）で海をかき回して引き上げたとき、矛の先からしたたる潮が固まってできたというものである。空想上の島であるのか、現実の島のいずれかに擬せられていたのかは不明であるが、現在、兵庫県の淡路島、沼島をはじめ数か所をオノコロ島にあてる考えがある。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話中播編	1972	郷土の民話中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫県むかしむかし第一集	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	今はむかし伝説紀行	2004	ビジュアルブックス編集委員会	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化	日本古典文学大系2 風土記(播磨国風土記)	1958	秋元吉郎 校訂	岩波書店
	家島群島 家島群島総合学術調査報告書	1962	家島群島総合学術調査団編	神戸新聞社
	日本古典文学大系67 日本書紀 上	1967	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
その他	播州善光寺 時光寺(参拝者資料)	不詳	時光寺	時光寺

所在地リスト



高御位山	高砂市阿弥陀町阿弥陀・加古川市志方町成井
家島神社	姫路市家島町宮991
時光寺	高砂市時光寺町12-18
網堂	高砂市伊保東1丁目11

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第2刷 2009年4月1日